

タイムベースドメディア・プロジェクト2020年度活動報告書

担当：三輪 眞弘（代表）、前田 真二郎、松井茂
履修学生：林 暢彦

研究概要

蓄音機や写真、映画の発明以来、人類は「装置を用いた表現」の可能性を様々な形で広げ、「いま、ここに」存在しない出来事を（擬似）体験することが日常のこととなった。特に映像や音響を含むあらゆる「表現」がデジタル化され、それらを次々と統合していくネットワーク上の「新しい時空間」の出現はまさに私たちにとって「第二の現実」としての存在感を獲得している。

このような状況の中で、かつて「芸術」と呼ばれていたものは、私たちにとっていま、どのような意味を持つものなのか？このプロジェクトでは特に時間-内芸術、すなわち時間的経過の中で行われる様々な「表現」に注目し、「装置を用いた表現」と伝統的な芸能の習得/実践双方を通して、この問題に取り組む。それは「機械」と私たちの身体との関係をめぐる探求であり、さらにメディアと人間存在との関係性を問うことでもある。



今年度の研究活動

今期は研究分担者として松井茂が加わり、3年計画のプロジェクトの最終年度を迎えた。プロジェクトでは例年、インドネシアの伝統芸能「ガムラン」のサークルを運営し、古典曲を練習するほか学生、教員による新作の発表なども積極的に行ってきたが、新型コロナウイルスの影響でサークル活動は一切行えないまま今年度をもって終了することになった。

その一方で、今年度はサラマンカホール主催、京都大学人文科学研究所とIAMASの共催のプロジェクトとしてサラマンカホールからの無観客ライブ配信「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 - 清められた夜 -」に総力を挙げて取り組んだ。

- ・ガムラン音楽研究、実習、調査（中止）
- ・「Online Screening & Talk #01」開催（8月）
- ・「生配信芸術」としての「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 - 清められた夜 -」公演（9月）
- ・学生作品の制作、発表（通年）
- ・プロジェクト研究発表会（IAMAS2021展）での展示、新作初演（2月）
- ・ICSAF 2020/JSSA先端芸術音楽創作学会研究会での学生発表（2月）

2020年度の活動

9月19日深夜にライブ配信された「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 - 清められた夜 -」公演では、三輪のガムラン・アンサンブルのための新作「鶏たちのための五芒星」が初演され、また、そのライブ配信そのものを「生配信芸術」作品として前田が映像監督を務め全体を指揮し、また松井は詩人として、参加学生もまた出演者として参加しこのイベントを成功させた。さらにIAMAS2021展ではその姉妹作品として「人形たちのための五芒星」が初演されたほか、それらとは別に8月には無料のオンライン上映とトークのイベントを企画し、ドキュメンタリー映画『動いている庭』を期間限定で無料公開した。

成果発表：

1. サラマンカホール「三輪眞弘祭」に向けて
(トークと公開リハーサル)

2020年7月24日 | 16:00- 17:00 (IAMAS OPEN HOUSE 2020)
IAMAS (SOFTOPIA JAPAN CENTER)よりライブ配信

出演：三輪眞弘 松井茂 前田真二郎

ゲスト：岡野勇仁、西村彰洋 (MIDI アコーディオン) 佐近田展康
(ラヂオ操作)



告知文：9月19日深夜に岐阜市のサラマンカホールで開催される無観客ライブイベント「三輪眞弘祭 -清められた夜 -」の全貌を新作《鶏たちのための五芒星》の解説と共に、三輪眞弘と前田真二郎と松井茂が大いに語る。さらに、当日初演されるフォルマント兄弟の《ボイパと海行かば》を2台のMIDIアコーディオンによる合成音声歌唱で試演する。(演奏：岡野勇仁、西村彰洋)

2. Online Screening & Talk #01：動いている庭 | The Garden in Movement
2020年8月1日 (土) - 8月9日 (日) 特別オンライン上映

【上映前トーク/25分】

ゲスト：

澤崎賢一 (アーティスト・映像作家 一般社団法人リビング・モンタージュ代表理事)

山内朋樹 (美学研究・庭師 京都教育大学 准教授)

聞き手：

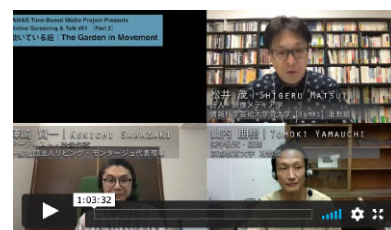
松井茂 (詩人・映像メディア学 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 准教授)

【上映85分】

【上映後トーク/63分】

ゲスト：澤崎賢一、山内朋樹

聞き手：松井茂



2016年 第8回恵比寿映像祭でのプレミア上映を皮切りに各地で上映されてきた、澤崎賢一監督による映画『動いている庭』を作家、ゲストを招いたトーク・セッションと共に期間限定で公開した。

3. プレ・イベント 三輪眞弘祭 - 清められた夜 -

プロローグ「音楽の終わりの終わり」は、ここからはじまる。

2020年8月28日 | 19:00- 20:30

サラマンカホールよりライブ配信

第1部 19:00~19:30

三輪眞弘による「三輪眞弘祭」プレゼンテーション

第2部 19:30~20:30

なぜ、いま「音楽の終わりの終わり」なのか？

シンポジウム出演（五十音順）：

岡田暁生（音楽学者、京都大学人文科学研究所教授）

前田真二郎 松井茂 三輪眞弘

司会：浦久俊彦（サラマンカホール音楽監督）



9月19日開催予定の「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 - 清められた夜 -」に向けて、主催者のサラマンカホールの音楽監督浦久俊彦氏、共催の京都大学人文科学研究所教授の岡田暁生氏とIAMASのTBMプロジェクト教員3人とのトークイベントが開催された。

4. ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 - 清められた夜 -

MUSICA CRAS GIFU 2020 Masahiro Miwa Festival - Purified Night -

2020年9月19日（土）23時開演

26時終演（22時よりスタンバイ 配信開始）

サラマンカホールよりライブ配信

告知文：日本の現代音楽界を独走する作曲家・三輪眞弘が、音楽芸術の現状と未来に本気の危機感を投げかける一夜限りのライブ配信公演。

予期せぬ新型コロナウイルスがアーティスト、音楽ホールの動きも停滞させ、音楽の発信の場はやむなくオンライン中心となった2020年上半期。音楽と観客の一体空間という、かつて当たり前だった姿が成り立たなくなったポストコロナ時代に、音楽は社会の中でどう生き延びていくか。音楽の歴史は根本的に変わってしまうのか。これからの音楽は、どこに光を見出せるのか。

「音楽の終わりの終わり」とも呼ぶべきこの状況を日本へ、そして世界へ向けて問うべく「音楽による音楽のためのお通夜」を岐阜市のサラマンカホールから無観客開催・ネット配信する。

西洋音楽の祭壇、パイプオルガンと共に J・オケゲムのレクイエムを人工音声で歌い、「霊界ラヂオ」が死者の声を傍受する。さらに今回発表される新作「鶏たちのための五芒星」では、人類の芸術を偲ぶ秘儀にオンライン上に接続された人々が立ち会うことが期待されている。それはまた、2000年に発表され17年後に再演された三輪+前田のモノローグオペラ「新しい時代」が描いた世界が今、現実となったということかもしれない。

情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 共催。先端的技術とアートの融合に挑み続けるこの研究・教育機関との連携により、従来のサラマンカホールの来客層はもとより、地球上の様々な人々がネットワーク・システムの端末として、この一夜限りの出来事の証人となるだろう。

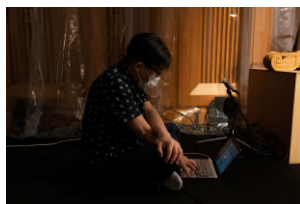
作曲・企画・構成：三輪眞弘

映像監督：前田真二郎

フォルマント音声合成：佐近田展康

詩：松井茂

写真：麥生田兵吾



舞台上で詩を配信する松井茂



悪魔役の林暢彦



出演：

川口隆夫（ダンス）

岡野勇仁、西村彰洋（MIDI アコーディオン）

塚谷水無子（オルガン）

江原優美香（箏）

ほんまなほ（ルバブ）

マルガサリ（ガムラン・アンサンブル）：恵美須屋直樹、大井卓也、黒川岳、

谷口かな、中川真、西村彰洋、森山みどり

公募パフォーマー

6羽の鶏

主催：サラマンカホール

共催：情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]、京都大学人文科学研究所



演目：

- ・三輪眞弘《鶏たちのための五芒星》（2020 サラマンカホール委嘱・世界初演）
- ・ヨハネス・オケゲム《死者のためのミサ曲》（15世紀）MIDIアコーディオンとオルガン版歌詞
- ・フォルマント兄弟《霊界ラヂオ》＋《ボイパと海行かば》（2020）歌詞
- ・三輪眞弘 箏と風鈴のための《もんじゅはかたる》（2019）歌詞
- ・三輪眞弘《神の旋律＋流星礼拝》（2020版）信者へのメッセージ

詩：松井茂《聖、或いは、日知り》（ホール舞台よりメール配信）



舞台裏 配信ブース

2020年のコロナ禍の中、岐阜市のサラマンカホールで無観客ライブイベント「三輪眞弘祭」を開催し、世界中からライブ配信の視聴回数3000以上、同時視聴者数約500人の視聴者を得た。また、この公演に関しては様々な新聞やウェブの記事、批評などでもとりあげられ、さらにこの公演に対して2020年度第20回佐治敬三賞が贈られた。

公演に関する記事、ほか：

- ・ ONTOMO 林田直樹のミニ音楽雑記帳 No.28 2020.09.14
[ニワトリも出演？ 音楽のお通夜をする挑戦的なライブ配信「三輪真弘祭・清められた夜」](#)
- ・ 中日新聞 2020.09.17
[音楽文化しのぶ「通夜」テーマ 三輪真弘の公演配信](#)
- ・ 岐阜新聞 2020.09.19
神秘の現代音楽 今夜ライブ配信 (by 大堀瑠美)
- ・ together まとめ 2020.09.20
- ・ 山崎与次兵衛アーカイブ：三輪真弘 2020.09.27
[「『三輪真弘祭 清められた夜』にネットワーク越しに立ち会う：ライブ配信視聴の記録」](#)
- ・ 中日新聞 2020.10.10
[<コロナとエンタメ> 瀕死の音楽芸術、再起問う 岐阜で催し](#) (by 花井康子)
- ・ 京都大学人文科学研究所共同研究班 2020.11.25
[生きるための人文科学 第三回「コロナ時代の未来の音楽」](#)
講師：三輪真弘（作曲家／情報科学芸術大学院大学・学長）
司会：岡田暁生（西洋音楽史：京都大学人文科学研究所教授）
- ・ 朝日新聞デジタル 2020.12.17
[（回顧2020）音楽・クラシック 公演減、内省が生んだ希望](#)
片山杜秀「私の3点」に2020年公演から『三輪真弘祭』が選出
- ・ IAMAS WEB イベントレポート 2020.12.28
[ぎふ未来音楽展2020「三輪真弘祭 -清められた夜-」を振り返って](#)
伊東信宏（音楽学者・大阪大学文学研究科教授）

2. IAMAS 2021 プロジェクト研究発表会

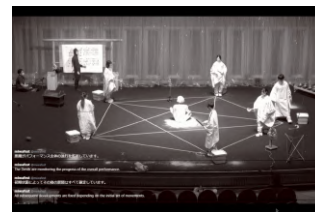
日時：2021年2月20～23日

会場：ソフトピアジャパン・センタービル ソピアホール

<https://www.iamas.ac.jp/exhibit20/>

- ・ 「三輪真弘祭 -清められた夜-」記録映像展示

9月19日のサラマンカホールにおけるライブ配信作品「三輪真弘祭 -清められた夜-」では三輪真弘による新旧の楽曲が演奏され、松井茂が詩で参加し、前田真二郎が映像監督を務めた。この3時間に及んだ配信記録のダイジェスト映像を展示した。



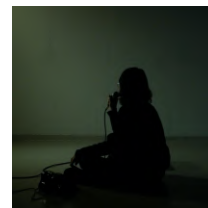
- ・ 林暢彦「A」（学生作品展示）

作品解説：未完の録音作品。作者は2020年9月11日から毎日1回、自分の声を録音している。1回の録音の内容は、録音時の日付時間と引き伸ばした母音「あ」、そして周囲の環境音である。母音の音程はA（110ヘルツ）に統一してある。展示は、日々の録音を日付順に再生することで、時間の推移にともなう個人の変化と同一性を可聴化する試み。録音は作者の死まで継続される予定である。

No Image

- ・ 林暢彦「117」（学生作品展示）

作品解説：映画体験における音と映像、メディア内の時間と実時間との間での同期と不一致をテーマにした新作インスタレーション。



・ マルガサリ特別公演

告知文：IAMASのタイムベースドメディア（TBM）・プロジェクトでは2018年度よりガムランアンサンブル、マルガサリの支援を得ながらガムラン音楽サークルを運営し、IAMASや学外イベントにおいてその成果発表やマルガサリの公演などを積極的に行ってきました。3年目の今年度はコロナ禍によってやむなくこのサークル活動も休止に追い込まれましたが、2019年9月19日深夜に岐阜市のサラマンカホールから配信された「三輪眞弘祭 -清められた夜-」（無観客ライブ）の3時間に及ぶ公演では三輪眞弘の新作「鶏たちのための五芒星」がマルガサリを中心にその他多くのアーティスト達によって初演されました。残念ながら今年度一杯でIAMASが借りていたガムラン楽器も返却し、サークル活動も終了しますが、3年間にわたるTBMプロジェクトとマルガサリの最後のコラボレーションとしてAR技術を用いた三輪眞弘の新作「人形たちのための五芒星」の初演を前田真二郎によるライブ映像＝生配信芸術作品として発表します。

人形たちのための五芒星（A Pentagram for Dolls）

2021年2月23日（火・祝）

IAMASよりライブ配信 16:00-

ガムラン演奏：マルガサリ

大井卓也 谷口かな 中川真 西真奈美 西村彰洋 森山みどり 柳野伽耶

スリン・ルバブ演奏：ほんまなほ

悪魔（AR camera）：林暢彦

作曲：三輪眞弘

映像：前田真二郎

音響：牛山泰良

ARプログラミング：伏田昌弘

協力：西本昂生 石田駿太

またりさま人形（2003）制作：小笠原則彰



作品解説：「コンピューターの動作を模倣する人間を模倣する機械」として「またりさま人形」は2003年、小笠原則彰によって制作された。8体の人形はそれぞれ水流（位置エネルギー）によって駆動される1ビットのメモリーを備えた排他的論理和（XOR）演算子として作動する。

この人形も含めて「またりさま」から現在にまで至る「逆シミュレーション音楽」という方法論が誕生する出発点となった作品、《ハープのための「総ての時間」》が初演されてからの20年を振り返り、この機械式記号処理装置を祀る儀式を、最新作の「鶏たちのための五芒星」で考案された演算システムによって行うことにした。

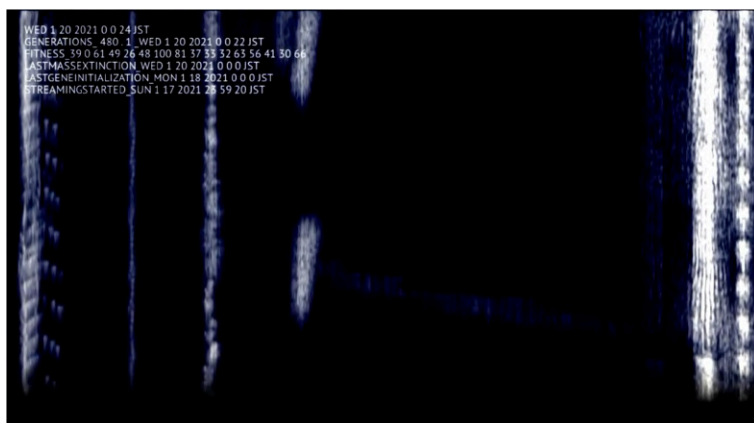
すなわち、五角形の辺と対角線を規則に従って移動するパフォーマーと、その移動をその場で生成される楽譜として読み替え、ジャワ・ガムランの様式で奏でる「傍観者」たちによる演奏である。ただし、「またりさま人形」は物体として実空間に置かれるものの、前作のパフォーマーたちは非物質化された記号（3Dオブジェクト）に替わり、その移動の様子はAR（拡張現実）カメラを通してでしか見ることができない。前作同様、ライブ配信を前提とした前田真二郎との「生配信芸術」の試みである。

Feb. 2021 三輪眞弘

学会関連の発表：

- ・ 第44回JSSA先端芸術音楽創作学会研究会／インターカレッジ・ソニックアーツフェスティバル2020
日時：2021年2月20, 21日
会場：オンライン開催 / YouTubeLive配信
- ・ 研究会セッション2でIAMASからは、西田騎夕が『アロエペラを素材とするバイオメモリスタを用いたアナログシンセサイザーモジュールの検討』を、木村佳が『演奏家のための「創造的解釈 — Creative Interpretation」について』を発表。
- ・ ICSAF 2020 「オンデマンド作品」として林暢彦が『Zoo Semiotics (Ladders) -demonstration 動物記号論 (梯子) デモストレーション』を発表。

作品解説：〈動物記号論〉は、生態系の内部での音響的な共進化の過程をモチーフに制作された生成音楽である。音響コミュニケーションを行う生物種の声の特性は、同じ環境に生息する他種の声との関係性によってある程度説明できる。声の「個性的」な音響特性は種の識別を容易にし、コミュニケーションの効率を高める。だから、共通した環境に生息するそれぞれの種は、進化の過程で「互いに異なる」声になるような進化の圧を受けてきたのではないかと。 作者は上のよう



な考えを踏まえ、遺伝的アルゴリズムによって、16種の人工生命がおのおのの「声」の周波数やその他の特徴を他の種とできるだけ異なるものになるよう進化する音響生成アルゴリズムを構築した。進化計算と音響合成はリアルタイムに行われ、情報科学芸術大学院大学のサーバー室から常時配信される予定である。進化計算の基準になる個体の適応度（優位性）は、それぞれの個体の遺伝情報（「声」の特徴を定義するパラメーター群）とその個体の属する種以外の種に属する個体の遺伝情報との差異の大きさから算出される。映像には、生成されたサウンドスケープのスペクトログラムに加え、生成時の日本標準時刻、進化計算の世代数、それぞれの種の平均的な適応度などが表示される。 毎週月曜日の午前零時に全ての遺伝子を初期化する。火曜日から土曜日の午前零時には、プログラム上の「大量絶滅」（多様性の激減）が起きる。日曜日は進化計算を行わず、土曜日の最終進化形が終日鳴きすだく。以下繰り返し。進化計算は確率的に行われるので、毎週聞こえる音は違う。初期化された遺伝子は、この作品のテーマというべきコオロギに似た「声」を生成する。作者は2018年に多摩川のほとりでコオロギの声を聴き、この作品のアイデアを思いついた。 はじめに声があった。人間の言語は恣意的な関係の上になりつつ体系だといわれるが、バイオフィニーにおいては、種間の声の音響的な差異それ自体が資源となる。声と言葉の間にどれほどの隔たりがあるうとも、我々もまた動物である。起源への梯子は天の高みではなく、「下方」へと伸びてゆく。 残念ながら、ウェブ上での安定したリアルタイム生成／配信は現時点では実現していない。今回のICSAFでの発表では、プログラムが生成した1週間分の音と映像の記録を抜粋して紹介する。

以上